

## 陳景揚「私の日本」

私は現在、文化人類学の観点から、日本地方の伝統的な焼き物の文化について研究を行っている。私にとって日本は何だったのかすなわちなぜ日本を留学先として選んだのかについて話したいと思う。

2002年10月、留学のため、初めて台湾から日本に来た。日本語学校に通った2年間を含めれば、今年で11年目になった。ご存じのとおり、台湾では、日本に対して好意を持つ人間が非常に多い。日本人の「礼儀正しさ」、「真面目さ」、「ルールを守ること」、「清潔」、或いは二年前の大地震のとき、世界中に広く報道された被災者たちの「冷静さ」、「助け合い」といった日本の国民の素質に対する評価は、台湾では、一過性の世論の反応ではない。長い間、沢山の台湾人にとっては、学ぶべき対象として見なされてきたものだ。私の実家でも、子供の頃から、おじいさんがよく食卓で、日本の良いところについて話してくれた。おじいさんは、日本植民地時代の明治6年に生まれた人間である。そして、戦後、蒋介石の軍事支配のもとで生きていた人間でもある。私は、おじいさんの「日本への思い出」を通して、小さいときから日本に興味を持つようになった。

日本留学の、もう一つ大きな理由は、母の影響だった。母自身も、日本で草月流生け花を勉強したことがある。母は、台湾で生け花教室を開いて、自分流の花器を作りたいくて、ついに自分でも花器の焼き物の窯を持つようになった。そして、日本の人々が、いかにして生け花や焼き物を通して、普段の生活の中で美しいものを楽しんでいるかも、母から教わった。母の教えは、私の現在の日本の焼き物文化の研究に直接に繋がった。

日本では、「民芸」、「手仕事」や「職人の技」と呼ばれる地域の伝統的な焼き物が、現在でも沢山健存する。北海道から沖縄まで、各地の風土や伝統を表す工芸品が、近代化の波にもまれながらも、消えて行っていない。「温もり」や「味」があるモノとして、消費者から支持を得て、国際ブランド品や大量生産の工業製品との競争を繰り広げつつ、小規模ながらも一定の市場を確立してきた。これは、戦後同様に経済的成長を果たす台湾では経験し得なかった近代化過程だと私は考える。このような台湾と日本の比較意識を持って、台湾より高度に工業化、資本主義化した日本では、なぜ、またいかにして、この種の「近代性」が実現されたかを解明しようと、研究を行ってきた。

特に関心を払っているのは、大正・昭和期の宗教哲学者・柳宗悦と陶芸家濱田庄司、河井寛次郎、染織家芹沢桂介、版画家棟方志功らを中心にして展開した民芸運動の役割だ。台湾の民俗文物店の看板などにも使われている「民芸」という言葉は、実際、民芸運動家たちが作った言葉だった。彼らは、工業化、近代化による生活様式の激変の最中、どんどん捨てられてゆく各地方庶民の日用品に、新たな美を見出し、これを新たな「芸術」と見なして、工芸の振興に立ち上がった。彼らは、新しい美的思想や学問を呼びかけただけでなく、自らも沢山のモノを収集し、実生活に使って、良いものに囲まれた生活を送っていた。民芸運動家の提案は、運動の実績や雑誌、メディアの報道を通して、日本の消費者が、地域の工芸品の価値を認知するようになるうえで、非常に重要な役割を果たした、と考える。

日本では、地域色のある焼き物の愛好家が非常に多くて、焼き物は、生け花だけではなく、料理やお茶の世界とともに、良い趣味や生活の豊かさの象徴として、人々に愛さ

れている。柳宗悦ら民芸運動家のライフスタイルを見ると、彼らのものの使い方や楽しみ方は、環境問題の解決にも繋がるように思われる。彼らは、趣味や流行を追って常に新奇なものを求めるというよりも、良いものを見極めて求め、一つのを長く使い続けて、使い込まれた艶や風合いを味わう。飽きてものをすぐ捨てることはない。こうしたライフスタイルは、現代社会の「使い捨て」によるゴミ問題の克服にとって、一つ有力な糸口になる、と私は日本の民芸文化から学んだ。

以上、私の日本について述べてきた。将来は、日本で学んだことを台湾へ持ち帰って台湾で活かしたい、台湾での工芸振興に貢献したい、と考える。生活と芸術、文化と産業の融合の問題、また、現代社会にとって最も喫緊の地球環境問題について研究すればするほど、日本から沢山の経験と知恵が学べるとますます確信するようになった。

かつて、中国の唐や宋の時代に、日本は、先端的な文化を学ぶため沢山の留学生を中国へ送っていた。その留学費用の殆どは、当時の日本政府や留学生個人が負担していたようだ。これに対して、今日の日本への留学生が、こちらの渥美国際交流財団のように、日本側から研究助成金をいただき、日本の学問を学んで、そして自由に自分の国へ持ち帰ることができることは、非常にありがたいことだ。